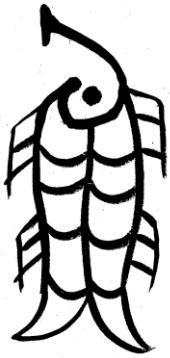
「漢字」の知恵って楽しい

御調西小学校　藤井　浩治

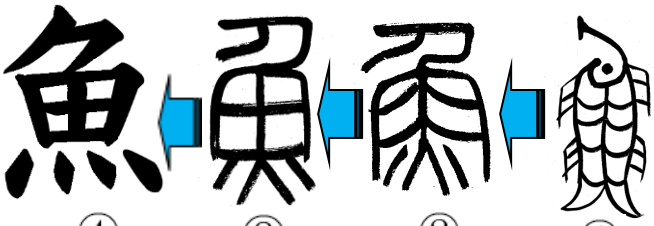
一．はじめに

漢字には、整えて書くための知恵がいっぱい詰まっています。小学校の書写の授業において、子供達にその楽しさを伝えていきたい、漢字の工夫を知らせてやりたい。私は、いつもそのように考えながら書写授業を考えてきました。

二．先人の知恵



さて、これは何という字でしょうか。字ではなく絵では・・と思ってしまいますね。しかし、これは今から三千年以上前に中国で書かれた漢字の元になる「甲骨文字」です。もちろん筆や紙は発明されていませんでしたので、亀の甲羅や動物の骨に刻み込んでいたので、その名前がつきました。甲骨文字は図象文字です、目で見てすぐに「魚」を表していることがわかりますね。これが元になって現在使われている「魚」という漢字になったのですが、現在の漢字が完成されるまでに約千九百年かかっています。



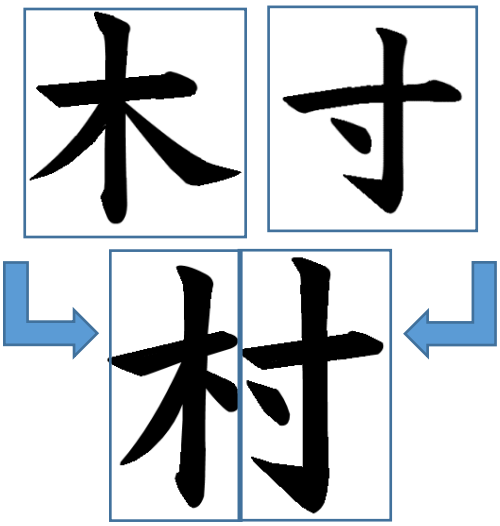
甲骨文字①では、意味は良く伝わりますが、うろこの数や背びれなど正確に覚えることは困難です。そこで、省略や書きやすさ読みやすさの観点で工夫改善が繰り返され②、③と変化していき、現在の④「魚」が完成したと考えられます。

また、③から④に至るまで約千三百年かかっており、漢字を美しく書きやすく整える工夫が繰り返されました。つまり、漢字には多くの先人達の知恵が詰まっていると言えるのです。

三．左右の組み立て方の「知恵」（１）

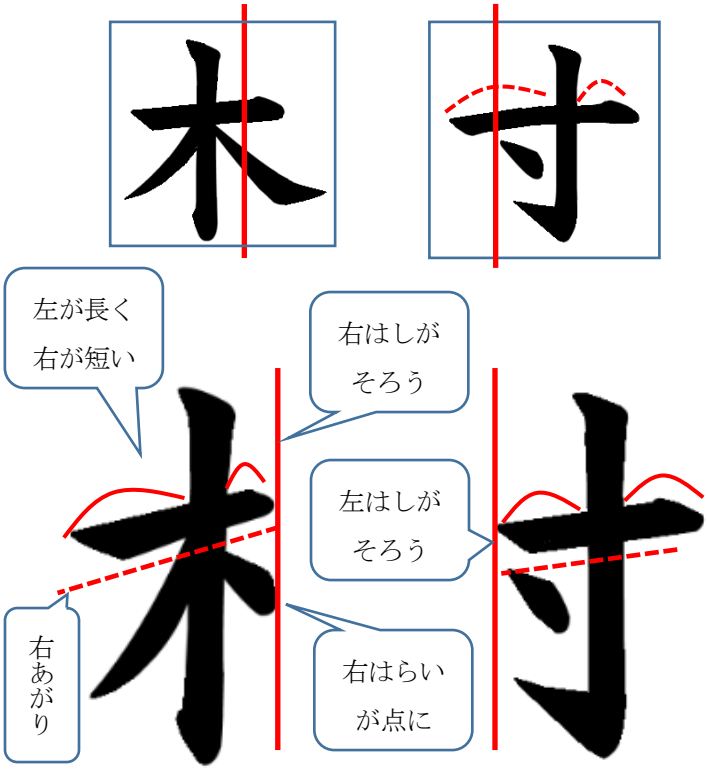
それでは、漢字を整えて書く知恵について具体を見ていきましょう。漢字には「左（へん）」と「右（つくり）」

で組み立てられたものが多くあります。



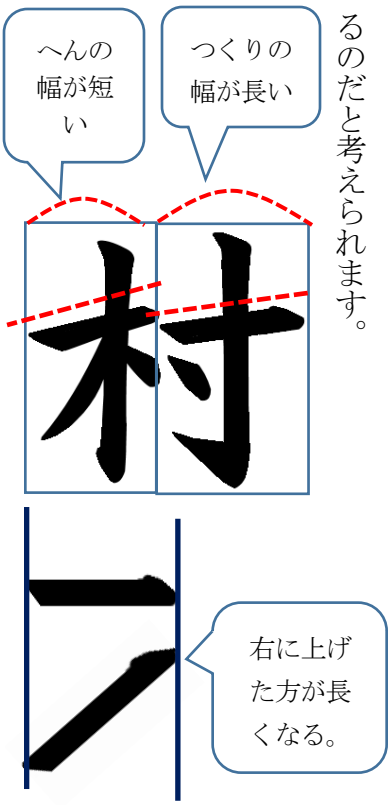
例えば、「村」という漢字は「木」と「寸」が左右で合わさってできた漢字です。そのまま合体させると「左右」がぶつかってしまうので、知恵を使っています。

まず、「木」の右側と「寸」の左側を削り取って、できるだけたてを揃えます。これでぶつからなくなります。特に「木」の「右はらい」は「点」に変化させて小さくしています。「木」の右側を削り取ったため、右端が揃うようになり、「木」の左側は削り取っていないので、横画は縦画から左が長く、右が短くなります。「寸」はその逆で、もともと横画は縦画から左側が長く、右が短かったのですが、「寸」の左側を削り取ったため、縦画から左右がほぼ同じ長さになります。



次に、「へん」の幅を少し狭くして、右上がりにします。理由は、横幅が短くなったため、「木」の横画がとても短くなります。それを防ぐために、少し方向を右に上げることで、横画を少し長くすることができるからです。なぜ、「つくり」はあまり右に上げないのでしょうか。それは、「へん」も「つくり」も両方とも横画を強く右に上げると、漢字そのものが傾いて見えるからです。それで、「へん」の横幅の方だけを少しせまくして右上がりにす

るのだと考えられます。



四．左右の組み立て方の「知恵」を使う

左右の組み立て方の知恵について考えてきました。「木へん」のつく漢字は「村」の他にもたくさんありますので、これだけ知っていてもたくさんの漢字を整えて書くことができます。例えば、小学校で学習する「木へん」の漢字は三一文字もあります。

〈一年〉　林・校・村
〈三年〉　横・板・相・様・柱・橋・根・植
〈四年〉　極・標・札・機・材・械・松・梅
〈五年〉　検・格・構・桜・枝・
〈六年〉　枚・権・株・机・模・樹・棒

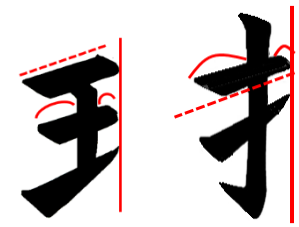
ここで、「木へん」の「知恵」についてまとめると次のようになります。

㋐ 横幅を「つくり」よりもせまくする
㋑ 右端をそろえる　㋒ 横画を右上がりにする
㋓ 横画は縦画から左が長く、右を短くする

しかし、実はこの「知恵」は「木へん」だけの「知恵」ではなく、ほぼ全ての「へん」の「知恵」なのです。それではいくつか他の「へん」を見てみましょう。

のぎへん

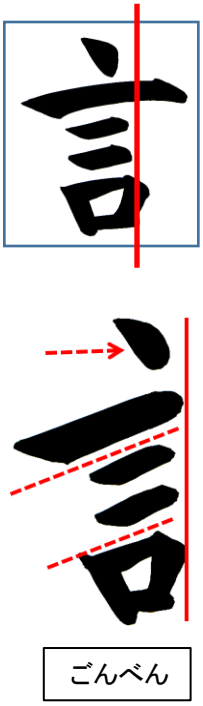
かねへん


てへん

たまへん

「のぎへん」・「てへん」・「かねへん」・「たまへん」全てに、「へんの知恵」（㋐幅が狭くなる㋑右端がそろう㋒右上がり㋓横画は左が長く、右が短い。）が当てはまっていることが分かります。

その他「ごんべん」の場合は、「言」の右側を削り取りますので、「点」も右に寄って右端をそろえることになります。注意しましょう。このように、「へんの知恵」は全ての「へんのある漢字」に応用できる知恵なのです。

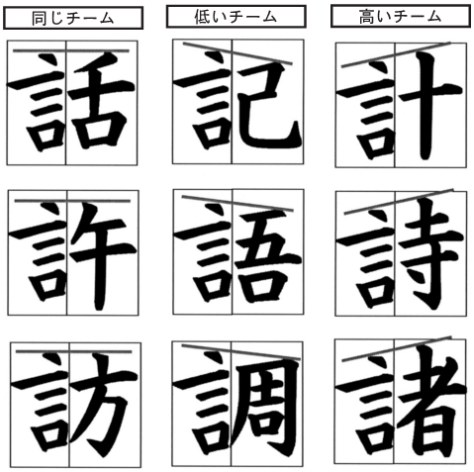


五．左右の組み立て方の「知恵」（２）

「左右の組み立て方」には、これまで述べたことの他にも「知恵」があります。

右の「計・記・話」を見てみましょう。同じ「ごんべん」の漢字ですが、「へん」と「つくり」の高さがそれぞれ違います。「計」は「つくり」が少し高く、「記」は「つくり」が少し低く、「話」は同じ高さになっています。これも文字が整って見えるようにするための「知恵」が使ってあるのです。

それでは、どんな時に「つくり」が上がって、どんな時に下がるのでしょう。そして、それはなぜなのでしょう。



まず、どんな時に高さを変えるのかについては、漢字をそれぞれ分類してみると分かります。

「ごんべん」の漢字九種類を高さについて上のように分類してみました。

それぞれのチームの「つくり」の上部に注目すると、共通点が見えてきますね。これが、左右の組み立て方のもう一つの「知恵」になるのです。まとめると次のようになります

① 「へん」よりも、「つくり」が高くなっている漢字は「つくり」の上部が縦画になっている漢字が多い。

② 「へん」よりも「つくり」が低くなっている漢字は「つくり」の上部が「横画」になっている漢字が多い。

③ 「へん」と「つくり」が同じ高さになっている漢字は「つくり」の上部が「点・左はらい」になっている漢字が多い。

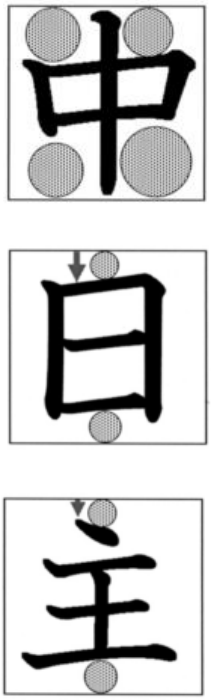
それでは、その他小学校で学習する全ての「ごんべん」を見てみると左のようになります。

① 高い「計・読・詩・談・試・講・諸・誠・討・**護**」
② 低い「記・語・調・課・証・設・評・誤・詞・認・訳・**訓**」
③ 同じ「話・議・説・許・訪・論・**誌**」※太字は例外

「護・訓・誌」のように例外もありますが、ほとんどの漢字に「知恵」が当てはまることが分かります。「口へん・石へん」等「小さいへん」にはもちろん当てはまりませんが、上下に「大きいへん」にはほぼ当てはまっています。

次に、なぜそうなるのかを考えてみます。

図①



図②

まず、「図①」のように、同じマスにいっぱいの大きさで「中・日・主」を書いてみました。「中」に比べて、「日」や「主」が大きく見えてしまいます。「中」のように「縦画」が上下に伸びた文字は、まわりに余白がたくさんできるので大きく書いても窮屈ではありません。それに対して「日」は上下が横画のため、まわりにほとんど余白がなく、窮屈に見えてしまいます。そこで、図②のようにかなり余白を取って小さく書く必要があるのです。「主」は上部が「点（斜画）」のため、「横画」に比べれば少し余白はありますが、やはり少し窮屈です。そこで、図②のように少しだけ小さく書くのです。このような理由で、「つくり」の上部が「縦画」の場合は上に長く伸び、「横画」の場合は余白を空けて下げる。「点・左はらい（斜画）」の場合は、少しだけ下げることになるのです。

六．おわりに

漢字には多くの先人の知恵が詰まっています。「へん・つくり」でできた漢字を書くときには、是非今回の知恵を使ってみていただけると嬉しいです。

※参考文献『新・字形と筆順』宮澤正明著（光村図書出版）
「字形要素における学習漢字の分類Ⅱ」
平形精一（書写書道教育研究第5号）

『御調文学54号』尾道市文化協会発行（令和２年３月）